

令和3年度
(2021年度)

事業報告書

(令和3年4月1日から令和4年3月31日まで)



学校法人
巨樹の会

目 次

I 学校法人の概要

- | | |
|-----------------------|-------|
| 1. 基本理念、建学の精神、教育理念、沿革 | 1 ~ 2 |
| 2. 教育方針 | 3 |
| 3. 設置する学校・学科等 | 4 |
| 4. 学生数の状況 | 5 |
| 5. 役員及び評議員の概要 | 6 |
| 6. 国家試験合格状況 | 7 |

II 事業の概要

- | | |
|---------------|---------|
| 1. 令和3年度事業の概要 | 8 ~ 9 |
| 2. 各学校の事業報告 | 10 ~ 37 |

I. 学校法人の概要

基本理念

手には**技術**、頭には**知識**、患者様には**愛**を

創設者の蒲池眞澄は、「患者のために医療を行う」という強い思いで、昼夜を問わず救急医療に励んできました。その中で医師のパートナーである看護師の教育を行いたいという熱い思いから看護学校を設立しました。また、患者様の生命を救った後の、日常生活動作の回復を考え、リハビリテーションを重視し、理学療法士、作業療法士の育成のためリハビリテーション学院を開校しました。今では助産師教育を含む7つの専修学校で育成を行う学院に発展し、そういった創設者の思いが『建学の精神』の根底にあります。

建学の精神

創設者の信念である「手には技術、頭には知識、患者様には愛を」を基本理念とし、医療のスペシャリストになりたいという学生の夢の実現のために「人間愛・自己実現」を教育理念として掲げ、人間性豊かで、社会に貢献できる実践能力を身につけた医療の専門職業教育を目指しています。

教育理念

人間愛・自己実現

学校法人巨樹の会の教育理念は「人間愛と自己実現」という人間の根本精神をあげ、一人ひとりの学生が人間愛の精神に基づき、対象を深く理解し、受け入れ、専門的な知識、技術、態度を身につけることができるような人材育成を目指しています。さらに、医療看護分野の専門性の追求のみならず、一生を通じて人格向上の努力を続け、自己実現していけるような人を育てています。

—— 教育にかける情熱 ——

学校法人巨樹の会は、創設者である蒲池真澄の「医師のパートナーである看護師の教育を行いたい」という熱い思いから始まりました。さらに、本法人は急速な少子高齢者社会の進展や疾病構造の変化により、在宅分野や予防分野など、リハビリテーションの需要がさらに増大してくる事を鑑み、その中核を担うセラピストの育成にも力を入れています。

知識は、学習の習慣と方法を修得できれば身につけることができます。しかし、医療従事者になりたいという思いは、他者から指導されて身につくものではありません。本当に医療従事者になりたいという思いをもった受験生にきてほしい、これが本法人の創設者の願いです。

本法人では、「人間愛と自己実現」という教育理念のもとで、基礎教育3年間、卒業してからの臨床教育3年間という「**6年間一貫教育**」をもって、患者様のために実践できる能力を身につけ、社会に貢献できる有能な人材の教育を行っています。

現在、本法人の専門学校7校の卒業生は約14,700人となり、看護師・助産師・理学療法士・作業療法士として、全国の医療の第一線で活躍しています。

〔 沿革 〕

平成 2年 4月	学校法人 福岡保健学院 福岡看護専門学校(3年課程)開校
平成 4年 4月	福岡看護専門学校2年課程(夜間定時制)開設
平成16年 4月	小倉リハビリテーション学院(理学療法学科・作業療法学科)開校 下関リハビリテーション学院(理学療法学科・作業療法学科)開校 八千代リハビリテーション学院(理学療法学科・作業療法学科)開校 福岡看護専門学校2年課程(通信制)開設
平成19年 4月	福岡和白リハビリテーション学院(理学療法学科・作業療法学科)開校
平成20年 4月	福岡看護専門学校水巻校(3年課程)開校
平成22年 4月	下関リハビリテーション学院に看護学科を開設 名称変更:下関看護リハビリテーション学校へ
平成22年 9月	みずまき助産院ひだまりの家を開院
平成23年 4月	武雄看護リハビリテーション学校(看護学科・理学療法学科)開校 福岡看護専門学校水巻校に助産学科を開設 名称変更:福岡水巻看護助産学校へ
令和 2年 4月	学校法人名を「学校法人巨樹の会」へ変更
令和 2年10月	令和健康科学大学(仮称)設置認可申請書提出
令和 3年 8月	令和健康科学大学 設置認可

3. 教育方針

令和3年度 学校法人巨樹の会 教育方針

1. 根拠ある実践力を身につけた医療従事者の養成を行う

1) 6年間一貫教育*1の徹底

(1) 実践能力強化に向けての教育体制作り

実践力強化のためのシミュレーション教育への取組み

PBL、OSEC等の主体的で対話的な深い学びができる教育方法の工夫

(2) 一人ひとりを大切にした教育体制(90%以上の進級・卒業率を目指す)

学生満足度の向上

(3) 専門職連携を踏まえた教育の強化

2) 国家試験資格取得にむけての確実な指導体制(100%合格を目指す)

3) 関連施設への就職(昨年度以上の就職率を目指す)

2. 次世代教育に向けて、実践力のある教員の教師力を育成する

1) 教育の効率、主体的学習意欲を高めるICT機器の活用ができるための研修の実施

2) 専任教員への養成と質向上への取組み

専任教員養成講習会(NS)・養成施設教員等講習会(PT・OT)への参加促進

専任教員(NS)の継続研修参加促進

3) 学内の研修制度の充実

中央研修への参加促進

学会、研修会参加の促進

4) キャリア向上のための修士・博士課程の大学院進学への推進

3. (仮称) 令和健康科学大学の認可実現と令和4年4月開学準備を目指す

大学準備室として6月補正申請を行い、翌年8月認可を目指す

令和4年4月、大学開学準備を行う

4. 福岡看護専門学校、福岡和白リハビリテーション学院2校の閉校に伴う申請と同時に、学生教育の支援のために教職員対応の充実を図る

専門学校の在校生の教育を教職員全員で支援する

閉校までの準備を滞りなく行う

3. 設置する学校・学科等

専修学校

学校名	開校年月	学 科		修業年限	入学定員	総定員数	備 考
福岡看護専門学校	平成2年4月	看護学科	3年課程 全日制	3年	50名	150名	
		看護学科	2年課程 夜間定時制	3年	50名	100名	平成4年開設
		※令和3年度学生募集中止					
小倉リハビリテーション学院	平成16年4月	看護学科	2年課程 通信制	2年	250名	250名	平成16年開設
		※令和3年度学生募集中止					
		理学療法学科	昼間コース	3年	80名	240名	平成18年40名増
下関看護リハビリテーション学校	平成16年4月	理学療法学科	夜間コース	4年	40名	160名	
		作業療法学科	昼間コース	3年	40名	120名	
		理学療法学科	昼間コース	3年	80名	240名	平成18年40名増
八千代リハビリテーション学院	平成16年4月	看護学科	3年課程 全日制	3年	40名	120名	平成22年開設
		理学療法学科	昼間コース	3年	80名	240名	平成18年40名増
		理学療法学科	夜間コース	4年	40名	160名	
福岡和白リハビリテーション学院	平成19年4月	作業療法学科	昼間コース	3年	40名	120名	
		理学療法学科	夜間コース	4年	40名	120名	
		※令和3年度学生募集中止					
福岡水巻看護助産学校	平成20年4月	理学療法学科	昼間コース	3年	40名	120名	
		看護学科	3年課程 全日制	3年	80名	240名	
武雄看護リハビリテーション学校	平成23年4月	助産学科	1年課程 全日制	1年	25名	25名	平成23年開設
		理学療法学科	昼間コース	3年	40名	120名	
		看護学科	3年課程 全日制	3年	40名	120名	

助産院

施 設 名	開設年月	部屋数	備 考
みずまき助産院 ひだまりの家	平成22年9月	6床	・H22.9～H23.3まで出張助産にて運営

4. 学生数の状況

(令和3年5月1日現在)

福岡看護専門学校

(単位:人)

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
看護学科 第1科 (3年課程 全日制)	50	140	49	150	149
看護学科 第2科 (2年課程 夜間定時制)	0	0	0	100	92
看護学科 第3科 (2年課程 通信制)	0	0	0	250	209
計	50	140	49	500	450

小倉リハビリテーション学院

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
理学療法学科(昼間)	80	91	89	240	239
理学療法学科(夜間)	40	36	36	120	90
作業療法学科(昼間)	40	48	46	160	109
計	160	175	171	520	438

下関看護リハビリテーション学校

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
理学療法学科	80	78	72	240	196
看護学科 (3年課程 全日制)	40	60	43	120	115
計	120	138	115	360	311

八千代リハビリテーション学院

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
理学療法学科(昼間)	80	174	108	240	273
理学療法学科(夜間)	40	66	44	120	139
作業療法学科(昼間)	40	58	43	160	122
計	160	298	195	520	534

福岡和白リハビリテーション学院

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
理学療法学科(昼間)	80	112	99	240	274
理学療法学科(夜間)	0	0	0	120	33
作業療法学科(昼間)	40	49	48	120	126
計	120	161	147	480	433

福岡水巻看護助産学校

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
看護学科 (3年課程 全日制)	80	143	82	240	228
助産学科	25	101	16	25	17
計	105	244	98	265	245

武雄看護リハビリテーション学校

学 科 名	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
看護学科 (3年課程 全日制)	40	73	43	120	127
理学療法学科	40	65	50	120	133
計	80	138	93	240	260

法人全体数	入学定員	志願者数	入学者数	収容定員	学生数
	795	1,294	868	2,885	2,671

5. 役員及び評議員の概要

(令和4年3月31日現在)

①役員・評議員の数

	選任条項別定数実数					
	選任基準			定数	実数	
理事 (定数7～11)	7-1-1	学校長及び学院長	理事会選任	1～2	2	9
	7-1-2	評議員	評議員会選任	4～5	4	
	7-1-3	学識経験者	理事会選任	2～4	3	
監事	-	-	理事長選任	2	2	2
評議員 (定数16～23)	24-1-1	法人職員	理事会選任	4～6	4	21
	24-1-2	卒業生	評議員会選任	3～5	5	
	24-1-3	学識経験者	理事会選任	9～12	12	

②役員名簿

役職	氏名	就任年月日	常勤・非常勤	選任基準
理事長	藤井 茂	H31.3.2	非常勤	7-1-3
理事	西村 泰治	R2.10.1	常勤	7-1-1
理事	松原 孝俊	H28.6.1	常勤	7-1-1
理事	鶴崎 直邦	H8.8.1	非常勤	7-1-2
理事	宮崎 澄雄	H15.12.3	常勤	7-1-2
理事	中野 盛夫	H23.3.28	非常勤	7-1-2
理事	寺坂 禮治	R3.10.23	非常勤	7-1-2
理事	蒲池 眞澄	H1.8.1	非常勤	7-1-3
理事	稲川 利光	R3.10.23	非常勤	7-1-3
監事	中尾 俊彦	H24.4.1	非常勤	-
監事	本岡 大祐	H30.6.1	非常勤	-

7. 国家試験合格状況

<第111回 看護師 全国平均合格率 91.3% 第105回助産師 全国平均合格率 99.4%>

学校名	学科名	受験者数	合格者数	合格率(%)	課程別 全国合格率(%)
福岡看護専門学校	看護学科第1科 (3年課程 全日制)	46	45	97.8%	97.0%
	看護学科第2科 (2年課程 定時制)	42	41	97.6%	95.8%
	看護学科第3科 (2年課程 通信制)	204	184	90.2%	86.2%
福岡水巻看護助産学校	看護学科 (3年課程 全日制)	66	65	98.5%	97.0%
	助産学科	17	17	100%	99.7%
下関看護リハビリテーション学校	看護学科 (3年課程 全日制)	35	31	88.6%	97.0%
武雄看護リハビリテーション学校	看護学科 (3年課程 全日制)	42	42	100%	97.0%

<第57回 理学・作業療法士 全国平均合格率 PT 88.1% OT 88.7%>

学校名	学科名	受験者数	合格者数	合格率(%)	課程別 全国合格率(%)
小倉リハビリテーション学院	理学療法学科 (昼間・夜間)	83	77	92.8%	79.6%
	作業療法学科(昼間)	30	27	90.0%	80.5%
下関看護リハビリテーション学校	理学療法学科	55	54	98.2%	79.6%
八千代リハビリテーション学院	理学療法学科 (昼間・夜間)	105	101	96.2%	79.6%
	作業療法学科(昼間)	39	39	100.0%	80.5%
福岡和白リハビリテーション学院	理学療法学科 (昼間・夜間)	76	73	96.1%	79.6%
	作業療法学科(昼間)	34	30	88.2%	80.5%
武雄看護リハビリテーション学校	理学療法学科	44	44	100.0%	79.6%

Ⅱ. 事業の概要

1. 令和3年度事業の概要

学校法人巨樹の会の令和3年度における事業の総括概要は、以下の通りである。

(1) 令和健康科学大学 設置認可

学校法人巨樹の会は、カマチグループの一員として平成2年より看護師、平成16年から理学療法士・作業療法士の育成を行い、合計6,949名の看護師、4,346名の理学療法士、1,544名の作業療法士の育成を行ってきた。そのような中、人生100年時代の到来、健康寿命の延伸、地域包括ケアシステムの構築、医療の多様化・複雑化といった社会構造の変化に伴い、健康の重要性は年々向上し、医療専門職者に求められる役割も拡大してきた。特に医療が多様化・複雑化する中では対象者を全人的に捉え、多くの専門職種と連携・協働しながら最適な医療を提供する力が求められるようになった。以上の背景により、学校法人巨樹の会は母体となる専門学校の教育的資源を継承し、「幅広い教養と思考力、探究心、倫理観を統合した実践力を備えた医療専門職」の養成を行い、持続可能な健康社会の実現を目指し、令和健康科学大学の設置計画を策定し令和3年8月27日に設置認可された。

(2) 学校法人寄附行為変更認可

令和健康科学大学設置に伴い、令和3年8月27日に学校法人寄附行為組織変更認可された。現在、大学法人への移行に伴い、学校法人や新設する令和健康科学大学の業務を適正に執行するためのガバナンスやコンプライアンスに関する認識を念頭に置き、様々な問題を円滑かつ適切に対応できる法人内の仕組みや体制等の整備を進めている。

(3) 八千代リハビリテーション学院 定員増員による増築工事着工

八千代リハビリテーション学院は立地条件も良く、過去5年間の募集活動も順調に推移し、今後も増員した定員以上の受験者数の応募を見込めることから、理学療法学科昼間コースと作業療法学科昼間コースについて、入学定員の増員令和5年4月より行うこととなった。増員により校舎も増築工事を行い、令和4年12月竣工予定で順調に工事が進捗している状況である。

(4) ハラスメントに関するアンケート調査の継続実施

様々なハラスメントの予防対策強化を講じるとともに、教職員の能力を高め、多様性、人格、個人を尊重する働き方の実現、健康と安全に配慮した働きやすい職場環境整備に取り組んでおり、今年度もハラスメントの予防・解決に向けた周知・徹底のため、さらには啓蒙活動の一環としてハラスメントに関するアンケート調査の実施を行った。

(5) 令和健康科学大学 校舎及び講堂兼体育館新築工事竣工

令和4年4月開学に向けて8月に設置認可された、令和健康科学大学の校舎が令和3年12月に、講堂兼体育館の工事が、令和4年1月に竣工した。現在は、運動場や、1号館の改修工事が大詰めを迎えている。



校舎



講堂兼体育館

2. 各学校の事業報告

法人の事業方針に基づいて、各校が策定した事業計画への主な取り組みは以下のとおりである。

福岡看護専門学校

学習者一人ひとりに目を向けた教育の推進 ～豊かな人間性、責任感のある看護専門職の育成を目指して～

(1) 実践力の向上

教育機材の充実を図り、社会に貢献できる実践能力を身につけた有能な人材の教育を行う。

①臨床判断能力の育成

全学年の各科目内で事例設定による患者のイメージ化や状況把握、その状況から起こっていることをアセスメントする能力、必要なケア内容と対象に適した方法の選択などについて事例を活用したシミュレーション教育を実施している。実践力強化を目指し、専門分野・統合分野ではシミュレーターを活用した演習や技術試験・技術チェックを実施した。例年経験値の低い看護技術について、観察や看護介入を学べるようにし、同じ処置を受けていてもいろんな状況でケア方法が変わることを考えさせるようにした。また、タスクマネジメント、タイムマネジメントについては状況設定から根拠を意識しながら判断できるよう思考のトレーニングを実施した。

臨地実習ではシャドー実習を取り入れ、看護師の判断を知る機会とした。またアセスメントを強化しケアの根拠を学べるようにした。

②シミュレーター（シナリオ・フィジコ等）の活用、教育方法の工夫

専門分野、統合分野においてシミュレーターを活用した演習や技術チェックを実施している。コロナ禍の代替実習においてもシミュレーターを活用することにより、臨地に近い形で観察力・判断力や実践を学び合うことが出来た。

③技術教育の強化とあり方の検討

専門分野Ⅰの演習において強化した。実習では技術経験録を基に受け持ち患者以外の看護技術を見学・実施できるように指導した。就職後すぐに必要となる項目について卒業前に技術演習を実施し学生の満足度も高かった。また技術教育の内容が実に教授できるようマトリックスを作成して基礎看護学の講義で演習を実施した。

④教育力向上に向けた教員研修の積極的な受講

コロナ禍であったが、オンライン研修でコロナ禍による代替実習に関する研修に参加し、研修での学びを代替実習に活かすことができた。本校はカリキュラム改正の準備がなかったが、新カリキュラムの内容などは年3回実施している教育研修時に伝達講習を実施した。

例年実施している関連校4校での中央研修も2回実施され、ほとんどの教員が参加した。またWebではあるが専門分野の能力向上のための研修、教育力向上のための研修にも参加した。

(2) 学生満足度向上の実現

①学生満足度の向上のための環境調整

Wi-Fi 接続時にパソコン動作が悪くなる等の問題改善のため、古いパソコンは更新した。また、音声聞き取りにくいことがあり、集音マイクを導入した。

コロナ禍であり、オンライン授業を見据えて1年生には入学前に住居に Wi-Fi 環境を整えておくよう依頼していた為、オンライン授業への切り替えとなった際も滞りなくカリキュラムを遂行できた。

毎年卒業時満足度調査を実施しており、前年度満足度が低かった項目はなかったが、「図書の蔵書が満足している」についてはやや低めの項目で、蔵書が古かったことが大きく影響していると考えられる。1月から大学図書館使用可となる為、満足度向上が期待できる。

2号館(新校舎)工事に伴う騒音については事前に説明し、窓の開閉で工事音の調整を行った。塗装のために窓の開閉制限があったため、新型コロナウイルス感染予防における換気の補完として、空気殺菌器の導入を行った。また、適宜CO2濃度を測定した。

1月からは新校舎を使用し、感染予防、清掃システムを整えた。学生は新しく静かな環境で学習出来ている。入館はICカードシステムが導入され、安全面につながっている。

②自ら学び探求していく教育方法の工夫

一方的な講義のみではなく、感染予防に努めながらグループワーク等を取り入れた。考えたり調べたりすることで自己学習能力につなげた。実習オリエンテーションは学生がプレゼンを実施した。他学生に説明するために実習要項を読み込み、受け身にならずに取り組んでいた。

臨地実習の事前学習は実習オリエンテーションやルーブリックを確認して学生自身で必要な学習を行うようにしている。

各学年、目標管理シートを用いて計画立案と評価を実施し教員が確認している。

卒業・国家試験へ向けての学生自身の目標が明確になるように、カリキュラム・実習・国家試験のオリエンテーションを定期的に行った。授業では、学生のこれまでの経験をふまえて考える事やグループワークで様々な意見を共有できるようにした。

(3) ICT を活用した教育の推進

①オンラインによる授業・実習指導の実施

コロナ禍の中、オンラインを使用して代替実習中の個別指導やグループカンファレンスを実施した。質問に対してもLINEやGoogleのクラスルームを使用し、リアルタイムで問題解決を図ることにつながった。

iPadで演習風景を録画して演習後のリフレクションに使用した。動画で観ることで学生の振り返りには効果的であった。

②ICTに関する教職員への研修の実施

改めて研修という形ではできていないが、オンライン授業の導入により、操作方法を学び全員のスキルが上がった。

③効果的なWi-Fiの活用

コロナ禍の中、オンラインを使用して代替実習中の個別指導やグループカンファレンスを実施

する際に Wi-Fi を使用した。Wi-Fi のアクセスポイントが追加され、Wi-Fi 環境が安定した。

(4) 各学年の履修率・卒業率向上のための取り組みの実施

①国家試験合格率 100%実現に向けての各学年の取り組み強化。

1, 2 年次から国家試験対策を計画的に実施。また 3 年次はクラス、グループ、個人に合わせ国試対策を実施。成績不振者に対しては長期休業中に専門領域別にセミナーを実施したり個別に学習会を実施した。

3 年生は国家試験受験を優先して 1 月下旬より自宅学習へ切り替えた。

オンラインで個別・グループ学習を継続した。

②主体的学習の支援、学習方法の確立、効果的なグループ活動

担任を中心として当該学年の履修はもちろん、未履修科目の履修ができるよう学習支援を実施した。また、1 年次より学習計画の指導を実施した。臨地実習の期間中は学内日に実習活動をグループで実施している。クラス全体で共有する内容もあるが、グループで学びの共有を行い、課題を明確にして取り組むよう支援している。

3 年生は学生の国家試験対策委員を立てて主体的に行動できるよう関わった。委員の協力は得られ委員を中心に国家試験対策に取り組むことができた。また、国家試験の学習は成績が同レベルのグループで行い、学習進度に差が出ず学習効果があった。

③臨地実習での学びの実感とタイムリーな指導

学生に学ばせたい技術については、実習指導者会議で依頼し、実習指導者より可能な限り、技術経験できるよう調整。学生 1 グループに 1 教員、実習指導者が指導に当たり個々へ細やかな指導ができた。学生からの評価も高い。患者へのケアを実施した後は教員もしくは実習指導者が学生とともにリフレクションを実施し、患者への効果や学生の課題を明確にしている。

実習後には学びの報告会やケーススタディ発表会を行い、達成感につながった。

④確実な単位習得修得への支援

特に 1 科 1 年生には閉校に伴い、次年度再履修が不可能である為、確実に単位修得できるよう入学時より説明した。学生自身の計画的な学習への取り組みを促すとともに、教員への支援も強化していき、単位修得できるようにした。終講時試験の結果が悪い学生については、夏期休業中、担任が個別に学習会を実施し、単位修得につなげた。

未履修科目が発生している学生に対して、次年度の夏期休業中に集中講義を計画し、単位修得を支援する。

⑤実習指導担当教員の充実

主な実習先である福岡和白病院と 1 回/月、他施設においても計画的に実習指導者会議を実施し、目標達成状況の確認、指導方法の確認など実施し、学生の状況に合わせた指導を実施している。

⑥カウンセリングの効果的な活用、学生個々とのかかわり

カウンセリングは月 3 回（男性カウンセラー 2 回、女性カウンセラー 1 回）が実施されている。カウンセラーの活用は多く、学生の利用は 1 回平均して 8 名程度である。

教員は学生との関りについてカウンセラーにアドバイスをもらい、学生支援に努めている。

学習で気になる状況については保護者に連絡をとり指導に役立てている。面接記録は必ず残し、教員間で共有している。年度初めに各学年の担任が個人面談を実施して状況の把握を行っている。その他も気になる学生や相談があれば個別で関わっている。カウンセリングが必要な学生にはカウンセリングを勧め、カウンセリングを受けている学生もいる。

(5) 社会貢献活動及び地域連携の充実

①福岡和白病院との共同活動（健康フェスタ・職場体験）

コロナ禍で健康フェスタの計画がなかった。ボランティアについては、コロナ禍ということもあり学校から紹介する機会がなかった。

数名の学生が福岡和白病院敷地内で実施された献血に参加した。

②地域清掃活動

大学建築のため、学校周囲の清掃は実施できていない。

(6) 効果的な広報活動の展開

①ホームページ等を活用して本校の活動を情報提供

募集停止の為、広報活動は行っていない。

在校生の活動等についてはブログの更新を月に1~2回担当者を決めて情報公開している。

(7) 経費削減

①前年度も実施した経費の見直しを継続して実施

メール配信することで紙への印刷を減らした結果、若干ではあるがファイル収納数が減り、用紙削減につながっている。

消耗品は、これまで使用していたものと機能は変わらないが、より安価なものを探し、購入している。

(8) 業務効率化の推進

①業務分担を再考し、ワークライフバランスを改善

共有フォルダを活用することで意見の集約、前年度の運営実績を確認して今年度の活動に活かすことで、メール配信回数が減少した。様々な規程、書類形式など教職員全員が使用できるようになっており、業務の効率化を図っている。

メールについてはGoogleアカウントが全員に付与され、情報共有、情報集約、オンライン会議の際の資料共有等大きく進展した。

教員の役割は年度初めに伝え、各学年は複数担当としている。教員によって業務量が多くなる時期があるが、必要時依頼をして協力できた。また、定時帰宅を推奨している。

全員が目標である年6日以上の有給休暇を取得できている。平均で12日/年であった。

②役割別マニュアルの見直し

看護学校4校の交流会で役割別マニュアルを作成しており、教員間で見直しを行い活用している。

③実習時間の検討・調整

令和元年より福岡和白病院では臨地での実習開始時間を30分遅らせている。このことより学内で教員の指導が十分行えるようになり、学生も実習目標や実施計画を明確にして実習に臨むことができています。

基礎看護学実習、成人看護学実習、老年看護学実習は実習時間内に実践活動外学習の時間を設けており、対象理解と看護に関する学習を深め、受け持ち患者への看護実践に活かしている。

(9) 業務効率化の推進

①個人目標の設定と評価

キャリア別に個人目標を設定し、中間評価を実施した。また、管理者による年度末面接を実施し、次年度に向けての目標・活動・将来展望について確認した。自身の目標を意識して業務に取り組むことができた。

②各科の特徴に合わせた教育目標の設定と評価

管理目標について中間、年度末評価を実施した。具体的な取り組みとその成果をできるだけ客観的に表現し、次年度の課題を明確にしている。2科は就業しながら学ぶ学生達であり、仕事と学校の生活の中で、自己学習の時間の捻出が困難となる学生が多く、体調を崩す学生も見られる。学習面と体調管理においては必要な学生には個々に関わり科目履修ができるよう支援している。各学年の年度末に学年到達目標に対して自己評価をしてもらい到達度を確認した。

③コミュニケーション能力とリサーチ力を駆使した組織づくり

経験からくるアドバイスを互に行い、助け合う組織となるようコミュニケーションを図りながら、組織で動くことを意識する。

学校内の委員会は各科の担当を決めており、科を跨いだ連携は図れている。また各委員会では計画立案と実施を行い、会議で報告を行っている。

小倉リハビリテーション学院

～共に進む信頼される学校作り～

(1) 教育理念・教育目標に基づき学生指導によるガバナンス強化

病院、施設訪問時や臨床実習指導者会議、就職説明会などの機会に、病院や実習施設からのニーズを調査し、対象者のために自己研鑽できる臨床家の育成に努めた。

iPadを活用した授業構成により、身体の構造についての立体的理解や視聴覚教材を使った授業を行なった。また、臨床につながる授業では、実技の動画を撮影し、セルフチェックに用いて客観的な学びにもつなげた。

遠隔授業システム (Zoom) の活用により、新型コロナウイルス感染症に因る体調不良や出校停止、また天候不良時の際にも、スムーズな授業対応ができた。しかし、遠隔授業では、学習の理解度を確

認しながら行うことが難しいため、その効果の検証を続けつつ、より効率的に活用できるよう、今後も積極的に ICT の活用について検討していく。

国家試験に向けた取り組みは1年次から継続して実施し、学年ごとに学年末試験においてその習熟度を確認している。取り組みの内容には一部グループ学習もあるため、感染対策を施したうえで実施し、受動的学習から能動的学習に移行できるように取り組んだ。

(2) 生活支援体制の充実

教職員による朝の挨拶運動を継続し、基本的な生活習慣を身につけるように指導した。また、朝と放課後に学習活動を行うことを通して、学生の理解度を定期的に確認することができた。

学内のカウンセリング体制をさらにアピールし、カウンセラーの来校を増やすことでカウンセリングを受けやすい環境や体制を確立した。

学事システムの機能を活用し、保護者にメールアドレス登録を依頼し、学生だけでなく、保護者とも連絡事項を共有している。今後は郵送で行なっている案内等の発送も、メールで行なえるように変更していく。

(3) 進路支援体制の充実

①国家試験合格率の向上

基礎分野の反復練習および思考力・判断力・コミュニケーション能力向上のために、セミナー等を実施している。合格率は90%以上を維持できているが、目標の100%全員合格を目指し、1年次から最終学年までの学習方法、学習形態等を検討する。

②就職率の向上

就職活動に向けて、施設見学の際の要点、履歴書の書き方、模擬面接等の指導を随時行なった。結果、年内に就職率100%を達成した。

③退学率の低減

成績不振による退学者の軽減のために、授業外のセミナーや個別指導等の取組を実施した。また、定期的な学生面談、スクールカウンセラーとの連携を通して、学習面及び心理面への支援を行なった。また、保護者との連絡を密にし、必要に応じて保護者面談も実施した。

(4) 業務効率化の促進

法人による教員研修会には全員参加し、学会等による研修会には各職員の希望に基づき、参加しやすい体制を整えている。今年度も昨年同様、対面での研修は減少しているが、オンラインによる研修会には参加している。

(5) 新入生入学に対する広報活動

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により広報活動が行ないにくい時期もあったが、感染状況が落ち着いている時期に、オープンキャンパスの開催、高校ガイダンスへの出向等、学校の広報活動を積極的に行った。また、希望する受験対象者に対し、関連病院にて理学療法士・作業療法士の仕事現場見学会を予定していたが、感染状況の拡大のためにオンライン対応に変更し実施した。

在学生の状況（在学中の生活の様子・卒業後の就職先）を報告するために高校を訪問し、進路指導部に対し本学院の学生指導の取り組み等を説明し、理解とともに関係を深めた。

就職先が決まった学生の就職先を、順次学内掲示するとともにホームページにも紹介し、資格取得後の就職先がイメージできるようにした。

ホームページにおいて、オープンキャンパス参加申し込みや入学試験など新しい取り組みも開始した。特に、Web 出願制度による入学試験は、提出書類等を分かり易い様に内容変更を行なった結果、利用頻度が増加した。

（6）業務効率化の促進

様々な作業をクラウド上で行うことで、効率化を図った。また、グループウェアの導入により、職員のスケジュールや会議室・公用車の予約管理を Excel 表、勤務管理システム、ホワイトボード掲示等、いくつかのツールで共有していたものを一元化することができるようになり、予定変更等を効率よく行なえるようになった。

職員室内の環境整備として、エアコンにプロペラファンを設置し、エアコンの直撃風を拡散することにより、冷暖房の温度ムラが攪拌され、空調効率が向上した。

（7）地域社会貢献

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響のため、学院祭が中止となり、地域との交流が行なえず、研修会等の会場借用の依頼もなかった。

近隣の中学校、高等学校への人材派遣（部活動支援や職業体験）などの地域貢献についても継続しているが、件数が減少し十分な活動はできなかった。

可能な範囲でボランティアを奨励しているが、感染症の影響により、学生が参加できる活動の多くは中止になっている。また、本学院の学友会が中心になって行なっている、学院から最寄り駅周辺までの清掃活動も中止となった。

ボランティア活動については、今後も感染状況に考慮しながら継続的に活動していく。

下関看護リハビリテーション学校

信頼され、選ばれる学校

学生の学力強化と ICT 教育、多職種連携教育(IPE)の強化

～ ひとりひとりを大切にしながら ～

（1）創造力・実践力の向上を目指した教育の推進

①両学科協力 IPE の充実（両学科）

・看護学科

各学年の学習進度や学習経験に応じて学びを積み重ねることができるよう、教育内容の順序

性を踏まえた合同演習を実施。学びを蓄積することで、最終学年では、対象の健康や生活を守る医療の提供に向けて、お互いの職種の専門性を活かしながら、対象の目標達成、問題解決に向けてより良い方法を検討するカンファレンスが実施出来ている。就職後の多職種連携・協働に活かす学ぶとなっていると考える。

- ・理学療法学科

各学年で後期に実施予定。多職種の役割について学ぶことができる。各学年でテーマを決めており、多職種の仕事の理解、連携しての患者介入、カンファレンスなどを実施。実習や卒後に向けた学習に役立っていると考えられる。

②シミュレーション教育の充実

- ・看護学科

1、2年生では、基礎看護技術の学習や専門領域の演習など各学年の学習進度や既習知識に応じた学習内容でシミュレーションを実施している。コロナ禍ということもあり、3年生は臨地実習を学内で補完することが多く、各実習目的や目標に応じた学習内容を検討し、教員全員で協力しながら実施した。

また、高機能シミュレーター2台を継続リースすることで、40名の学生がシミュレーションを円滑に実施できている。

(2) 学生満足度向上に向けた取り組み

①教員の教育力向上

- ・看護学科

今年一年コロナ禍で臨地実習に行くことができなかったが、学内でのシミュレーションで患者役を行い、事例を追加するなどして、学生の学修に創意工夫することが出来た。それを評価し、学科会議で、教員全員で検討することで、シミュレーション教育の質の向上につながっている。

中央研修（法人）にはZoomではあったが、全員が研修に参加した。学生対応に関する内容であったので、早速日ごろの対応に役立っている。その他対面での学科や研修会には参加できなかったが、ズームで参加した。

新カリキュラムを皆で検討できたことは現行カリキュラムの見直しと、意識の統一を図ることができて良かった。自分の担当する科目の位置づけを把握し、関連性を考えながら講義できるので、今後は授業に参加し、評価しあうなど教員間でできる体制をとっていきたい。

- ・理学療法学科

シラバスを半期ごとに見直し、国家試験及び臨床内容に即したものにしている。また、教員相互の講義評価を実施し、意見交換の場を設けている。学科内にて情報をより共有できることが望まれる。

法人で開催される教育に関する研修会には全教員が参加している。しかし他の研修・学会等については、参加計画を立てているものの、コロナによりやや参加が少ないように感じる。

②教育教材の充実

- ・看護学科

今年度高度シミュレーターを2台レンタルすることに許可を頂いた。IPEで両科共に活用でき

た。また実習に行くことが出来ない為に、有効に使用することが出来た。来年度も活用していきたい。

シミュレーションを充実させるために事例展開（電子カルテ）できるアプリを購入した。

e ナーストレーナー（アプリ）を購入することで、動画やテキストを自由に使用できる学習のしやすさを提供した。

・理学療法学科

教材としては、義肢・装具、体圧分散計の新規購入、血圧計・聴診器等の入れ替えなどを行った。昨年度は、骨模型についても現状の 1.5 倍になるよう追加購入を予定、教室の床の張替えも予定している。

③進路（就職）支援の強化

・理学療法学科

コロナ禍ではあったが、5月にお仕事サポートセンター職員による「履歴書の書き方」「面接での注意点」、青山商事職員による「スーツ着こなし講座」を実施した。7月には合同就職説明会（福岡国際センター）を対面で開催し、159 施設（前年 105 施設）のご参加をいただいた。また、10月には本校にて対面とオンラインでの就職説明会を開催し、60 施設（前年 41 施設）のご参加をいただいた。

学年主任、担任、就職委員を中心に、学生の就職活動状況の把握に努め、学科内での情報共有が十分に図られた。また、面接指導や履歴書指導・添削もほとんどの学生に実施するなど、昨年からの改善がなされた。

昨年度の反省を踏まえ、年度当初より学生へ就職活動を促し、12月中に100%内定を目指してきたが達成することはできなかった。2月18日現在、未内定3名という状況である。未内定者3名については、不採用通知、国家試験への不安、自身の進路への悩み等により就職活動を自粛していた。次年度は12月までに内定率100%が達成できるよう、学生への促しを積極的に行う。

・看護学科

年々就職試験が早まってくるので、2年生の3月から下関市内の実習施設4施設と、関連病院の就職説明会を計画実施した。それに伴い、教員から就職ガイダンスで、就職先の決め方、個人の強みの表現方法、履歴書の書き方、手続き方法等指導した。全員の履歴書について、添削指導でき、面接試験の練習も希望者には実施できた。

例年100%の就職率であったが、未履修科目を後期に持っていた学生が2名、再実習になった学生が2名いたため、国家試験学習に集中し合格後就職活動するように計画した。しかし、国家試験不合格となり、看護師としての就職はできなかった。

④感染予防対策の充実（両学科）

感染対策設備として、学校入口にスタンド式の手指消毒を2台設置した。それにより、学生は手指消毒を行った後に校内に入ることが出来、感染対策行動が出来ている。また、サーキュレーターを教室内に設置し、教室内を常に換気できるようにしている。各教室の机やドアノブなど、常に触れる部分はアルコール消毒を行えるよう、環境クロスを購入して使用している。

学生に対しては、体調管理表を用いて行動確認や体温、症状など体調把握を行いながら感染対策に留意した。教職員も同様に体温表を使用した体調把握を行った。また、感染対策マニュアルを

作成し、感染者や濃厚接触者への対応を行った。

⑤学校および学生寮の施設・設備の改善

教育設備としては、3番、6番、7番教室のプロジェクターを最新の物（HDMI ケーブル対応）に取り換え、1・2番、4・5番教室（合同教室）の後方座席用モニターを設置、1・2番教室のスピーカー・アンプの交換・調整、パソコン教室専用のマイク・スピーカーを購入・設置を行った。

3月には学生更衣室の床の張替えとロッカーの入れ替えを実施予定である。また、次年度に向けて、各教室に据え置き AppleTV を設置予定である。

次年度は教室の床の張替えを予定している。今後、経年劣化に伴う修復だけでなく、さらに校内の環境を整えていく予定である。

（3）ICT 環境の運用

①ICT 環境・設備の改善

Apple TV の台数が不足していたため、全クラスが使用できるように追加購入した。GWS のアカウント取得により、会議資料などが同時編集できるようになった。他校との情報共有も行いやすくなった。理学療法学科の合同教室にモニターを増設して、後方の学生がスライドを確認しやすくなった。Zoom と対面のハイブリットによる授業や保護者会での音声不良の改善のため、集音マイク・スピーカーを導入した。

②ICT 教育力の向上

・看護学科

アプリを活用し、プレゼンテーションを活用したり、情報共有したり電子テキストを用いて教育している。またシミュレーションで看護技術の実施状況を動画撮影し、振り返りに活用するなど、教員はもちろん学生たちも自主的に活用している。

看護研究の時間に文献検索方法を学び、また情報リテラシーで SNS 活用方法を学んだ。かなり検索する時間が早くなり、学生は素早く使いこなしている。今後電子テキストと講義ノートをどのようにつなげるか、ポートフォリオを作成し活用しているが、知識の蓄積と確認のためノート作成の確認をしていきたい。

授業評価や、アンケート等 QR コードを活用し、集計を素早く可視化できている。また、遠隔授業もタブレットを用いて、実施している。

国家試験対策として、アプリを用いて、試験問題を解き自分なりに解答を導き出すように指導している。しかし、どうしても答えを覚えようとするため、テキストを活用しての学習方法を指導していく必要がある。またアプリでは正答率や取り組み状況など確認できるため、データを用いて、指導してくよう教員も学習する必要がある。

来年度の中央研修では当校が「ICT 活用」について講義する予定である。

・理学療法学科

教育用アプリの活用、動画による実技テストの振り返り、小テストやアンケート実施など、タブレット活用による教育が広がってきている。遠隔授業の実施にもタブレットを活用している。タブレットの使用法は限定的であり、もっと幅広く使えるように情報収集が必要である。教育における ICT の活用方法について3月に中央研修を実施予定である。

(4) 退学者抑制の取組み（進級率・卒業率 90%以上の実現）

①学生の情報共有と問題の確認と問題に応じた早期対応

・看護学科

今年度の退学者は2月まで0名であった。しかし、進級にあたって3月にやはり学力低迷者及び進路変更で3名の退学者が出た。将来の夢がまだ明確でなく、すすめられて入学したとしても、看護の楽しさや追及していく楽しさを教授できるように、授業の工夫や学生の主体的な活動を支援していく必要がある。各学年成績や進路などに悩みがあるときには学校カウンセリングを勧め、保護者へ連絡し、連携を取っている。定期的に面談を行い、学生の状況を把握し、学科会議で共有している。

・理学療法学科

今年度の退学者は9名（1年生6名、2年生2名、3年生1名）であり、退学率は4.6%（9名/19名）となった。

担任を中心として定期的な面談、保護者連絡、スクールカウンセリングの促しを行っていた。今年度の退学者については、成績不振を理由にする学生がほとんどであり、定期試験の期間中や再試験を受験せず退学届を提出するなど、例年になく届出の提出であった。

改めて、オープンキャンパスなどの入学前に学習の大変さについて説明するとともに、入学後からの学習支援について検討しなければならない。

②カウンセリングの活用とカウンセラーとの連携

・看護学科

定期面談や必要に応じての面談で把握した学生の状況を相談し、学生にカウンセリングを勧めたりしている。

・理学療法学科

必要に応じて学生面談の中で、カウンセリングを勧めるケースもある。カウンセラーとの連携は常に行っており、必要に応じて教員から、あるいはカウンセラーから相談を行えるようにしている。

③保護者との連携

・看護学科

各学年保護者会を定期的に開催し、学年のカリキュラムや進学就職等必要なことを報告している。またその時に面談が必要な学生と希望する学生に三者面談を実施している。

また欠席が続き、成績が低迷している等担当から保護者に連絡している。再試験や再実習については学生から保護者へ報告し、その後面談の日程を調整して三者面談を行っている。広報委員会より、保護者への一斉メールを開始するシステムを導入され、必要に応じ活用するようにしている。

・理学療法学科

授業の欠課が続いたり、様子が変わったことがあったり、成績が低迷していた場合など、学校からも保護者に連絡を入れるようにしている。

また、今年度より保護者への連絡用一斉メールを開始した。しかし、様々な原因で受信できてい

ない保護者が数名いた。そのため、次年度には連絡用アプリを用いた連絡体制の整備を行う計画である。

④学習支援強化

・看護学科

1年生は2年生のチューターから学習方法やノートの取り方を学び、看護技術も放課後を用いて試験前など指導を受けている。この体制をとってから2年生の自覚と縦のつながりができてきた。教員は指導している場面に参加し、助言したりして支援している。しかし、学力低迷者は学習習慣もなく、成績も上がらない為、担当教員がその都度面接し、指導している。3年生は模擬試験の結果から教員全員チューターをつけて指導してきた。夏季及び冬季にセミナーを設け、問題の解き方考え方等指導してきたが、コロナ禍を理由に学力低迷者ほど出席しなかった。ズームも活用したが、対面での個別指導の効果があり、学習を継続させる指導について教員全員で考え教育していく必要がある。

・理学療法学科

1, 2年生については、時間外で小テスト・確認テストを実施し、学習を促すことを行ってきた。学習効果は認められるものの、不十分な学生もみられるため、より個別性を重視した関りの検討が望まれる。

3年生については、臨床実習において教員による実習地訪問を実施し、学生個々の問題点を早期把握と解決に努めた。理学療法総合学習および国家試験対策では、成績不良者に対し早期より少人数対応のセミナーや個別指導を実施した。

⑤自ら目指す職種に喜びと誇りをもつ学習内容と学校生活

・看護学科

1年生のガイダンスからビジョンゴールシートを作成し、戴帽式や年度末など中間評価最終評価をして、確認した。2, 3年生もそれを継続している。

看護学概論や看護管理の講義の中にキャリアデザインを取り入れ、認定看護師や専門看護師、CN等教授している。

卒業生が時々3年生を激励に来校している。直接学生に話をしてもらう時間を設けたりしている。また病院の就職説明会の時に卒業生も参加し、看護師として大変なこと嬉しいことなど話してもらい質疑応答しているので、学生は良い刺激を受けている。

臨地実習では受け持ち患者の看護をカンファレンスで話し合う際、看護観に関しては学生の考えを否定せず、看護する喜びを交えた指導者や教員の看護観を入れて総評をしている。

・理学療法学科

1年次の正規講義(リハビリテーションと理学療法)の中で、現場で活躍する現役理学療法士を招いて講義を行っている。また、自分自身の将来について考え、キャリアデザインを作成し、発表・提出を課している。日本の医療・福祉・教育に関する情報を集め、ユニークなキャリアデザインも散見されている。

対人関係演習Ⅰ、臨床実習Ⅰ(見学実習)が新型コロナの影響により現場で実施できていないことが今後に影響を及ぼすと思われる。

今後、現場の理学療法士(できれば卒業生)によるセミナー等をカリキュラム外で企画し、補完

していく必要がある。

(5) 国家試験合格率 100%実現に向けた取り組み

①学年に応じた学習指導

・看護学科

国家試験全員合格は看護学科管理目標でもあり、教員全員が看護師になってもらいたいという願いのもと、各学年の教育計画を立案し、4月初めの学科会議で共有している。

1年生：特に解剖生理学・病理学が弱いので、教科外活動で人体模型を作成させ、マインドマップを発表した。また、人が「生きる」を食事、生活、排泄等日常生活から考えグループワークでまとめ、年度末に発表会を行った。入学時には国語力、数学、生物学のプレテストを実施し、年度末には低学年模試を実施し、実力を確認している。

2年生：4月に110回看護師国家試験を実施し、自分の弱い科目の確認と、今後1年間専門科目を学んでいくための具体的学習計画を立案する資料とした。年度末に必須問題を解き、70%の正答率がない学生は春季休業中に5クール必須問題を解き、70%以上になる学習を積んだ。

3年生：4月に110回看護師国家試験を実施し、問題の傾向を確認した。年間の模擬試験計画を立案し、実施。夏季休暇前模擬試験の成績により、セミナー参加者を選定し実施。成績低迷者は再実習とも重なり、なかなか成績を伸ばすことが出来なかった。教員全員でチューターとなり、個別に指導してきた。学生の状況は随時学科会議内で共有してきた。冬期休暇中にもセミナーを実施したが、成績低迷者はコロナ禍を理由に参加せず、1月からの学内での対策にも参加しなかった。他学生が学内で学習し、コロナ陽性になることなく、成績ものびてきたため、参加するようになったが、合格は困難であった。

合格率 88.6% (31/35名)

・理学療法学科

年度初めから、国家試験対策についての年間計画やシステムについて検討した。

1・2年生：グループ校統一模試を作成し、半期毎に実施した。さらに全国模試『医歯薬3科目模試』を年度末に実施予定である。

3年生：今年度からグループ学習を止め、個人学習と2～3人での口頭試問、教員による分野セミナー、個別対応を活動の主とした。模擬試験後には「模擬試験セミナー」として教員による全問題の解説を実施し、知識の定着や症例イメージを伝えるなど工夫した。

成績不良者への対応については、例年より1か月早い10月から土曜・祝日登校を義務付け、教員による少人数対応を行った。成績不良者の選抜についても、学年主任、担任、役職者で最新の成績や学習への取り組み状況などを頻回に協議し、躊躇することなく見直しを行った。

例年に比べ、今年度は体調不良(主にメンタル面)のために継続的な登校が困難な学生が多く、個別対応や面談など行い学科教員で支えた。

合格率：98.1% (54/55名)

②教員の指導力強化

・看護学科

中央研修や学会に参加を促し、積極的に参加している。今年度は Zoom での研修ではあったが、下記のテーマで4回教員全員が参加した。

- 1) 中央研修「発達しょうがいの理解と対応～成人期を中心に～」
5月8日(土) 児童発達支援センターこだま 緒方よしみ先生
- 2) 中央研修「ワクワクの学びを展開しよう!～ファシリテーションのいろは～」
8月28日(土) 京都大学大学院 内藤知佐子先生
- 3) オンデマンド「看護形態機能学の理解と活用」
8月2日(月) 菱沼典子先生 大久保暢子先生
- 4) アーカイブ 「医学書院の電子教材を用いた ICT 教育の実践活用事例」
9月28日(火)

また、新カリキュラムの検討を全員で行い、担当科目の位置づけや教育内容の見直しができた。担当講義については実施前に学科会議で授業計画を提案し、検討している。

教員の学修してきた結果を外部で発表し、評価を受けるように推奨している。今年度は学会が対面でなかったため、ズームでの参加となった。しかし、雑誌投稿を下記の内容-1)で行った。投稿後雑誌社より原稿依頼があり、次いで-2)を投稿した。

- 1) 田中亜紀子, 伊織信一, 森寺智子, 鮫島陽子: 専門学校における新カリキュラムに向けた IPE の検討; 看護学科と理学療法学科の合同シミュレーション演習を実施して, 看護展望 46(13): 76-82, 2021
- 2) 小林愛, 田中亜紀子, 森寺智子, 鮫島陽子: 地域での暮らしを支える「地域・在宅看護論」の構築, 看護展望 47(4): 臨時増刊号, 2022

また、南江堂より WEB「NurSHARE」にこれからの看護専門学校における看護教育求められるものという内容で原稿依頼があり、「下関看護リハビリテーション学校における新カリキュラム構築の取り組み」というテーマで森寺智子、小林愛、田中亜紀子、鮫島陽子共同で投稿した。

結果を論文にし、残すことで、講義内容や講義方法、学生への指導方法に研究的視点で見ても取り組むことが出来る。教員一人一人がその意義を理解し、研究に取り組める環境を今後でも作っていく。

教員研修を終了し、経年別にフォローアップ研修が計画されているため、該当する教員は参加している。今年度は中堅専任教員の教育実践能力の強化として「ICTを活用した授業設計」西村玲子先生の講義に石松法子が参加した。

・理学療法学科

教員間授業評価を実施し、互いにフィードバックを実施している。しかし、学科内での情報共有やベテラン教員に指導、他校の同じ教科担当者との情報交換や授業見学など、今後充実をはかっていく必要がある。

研修会参加については、コロナ渦で少なかったものの教育に関する研修会へ下記の通り参加している。

1	研修名：中央研修（学校法人 巨樹の会 リハビリテーション部門） 期 間：令和3年8月26日（木） 対象：教員 12名 内 容：看護系学校のこれからの授業 講師：佐賀大学 達富 洋二 氏 ・目標設定 ・評価の明示 ・《私の問い》の言語化 ・遠隔授業の活用
2	研修名：第8回 大学・専門学校 教職員対象オンライン配信セミナー （株式会社ナガセ 東進ハイスクール） 期 間：令和3年9月24日（金） 対象：教員 1名 内 容：『入学前教育』の効果を最大化するポイントとは
3	研修名：第557回臨床実習指導者講習会（公益社団法人日本理学療法士協会 他2 団体共催） 期 間：令和3年11月27日（土）、28日（日） 対象：教員 1名 内 容：臨床実習指導者のためのグループワークと発表
4	研修名：第577回臨床実習指導者講習会（公益社団法人日本理学療法士協会 他2 団体共催） 期 間：令和3年12月11日（土）～12日（日） 対象：教員 3名 内 容：臨床実習指導者のためのグループワークと発表
5	研修名：第623回臨床実習指導者講習会（公益社団法人日本理学療法士協会 他2 団体共催） 期 間：令和4年1月29日（土）～30日（日） 対象：教員 1名 内 容：臨床実習指導者のためのグループワークと発表
6	研修名：中央研修（学校法人 巨樹の会 リハビリテーション部門） 期 間：令和4年3月7日（月） 対象：教員 12名 内 容：「貴校の主体的学習状況と改善方法ワークショップ」 「ICTによる学習効果向上と iPad 活用方法」 講 師：東海大学理系教育センター(情報教育センター) 白澤秀剛 氏
7	研修名：中央研修（学校法人 巨樹の会 リハビリテーション部門） 期 間：令和4年3月11日（金） 対象：教員 12名 内 容：実践力を育てるパフォーマンス評価 講 師：京都大学 西岡 加名恵 氏

③自己学習力の強化

・看護学科

学生に対しては1年次より学習の仕方の説明を行い、適宜確認し指導している。授業に関してもグループワークでの発表だけでなく、個人ワークの発表など個人の学びを発表する機会を作っている。それと終講試験や模擬試験の結果とリンクさせ、学生に学習継続の必要性を指導している。

教員に関しては、学習意欲の強い教員なので、先に記したように外部への発表の機会をこれからも作っていききたい。また今後は教員間で授業評価できるように授業参観の機会を作るなど検討

していく。

・理学療法学科

能動的な学びを促すために、各科目において課題を提示するなど工夫した。真剣に取り組む学生も多くみられたが、取り組みが不十分な学生も少なくはなく、そのような学生への能動的な学習を促すことが困難であった。

教員の意識改革、各講義での工夫、学習支援対策などで成功体験を積み上げていく体制やシステムを構築していきたい。

(6) 定員充足の取り組み

①インターネット、SNS 等による情報発信の強化

学校の認知を広める目的で、Web 広告媒体としてバナー広告を継続して実施した。受験対象者のオープンキャンパス来校数が伸び悩んでおり、7月に高校の位置情報を元にしたジオターゲティングを実施。また11月に広告配信エリアを北九州、広島方面へ広げた。年末には Instagram 広告を実施した。配信を強化した時期が遅く、定員充足に対する効果が不十分であったが、高校2年生の来校数は両学科とも前年を超えていた。

②高校・大学訪問の強化、ガイダンスへの積極的参加

新型コロナの影響で上半期はガイダンス参加が減ったものの、下半期は増加し年間68件となったものの、ガイダンスの参加者は410名(2月実施分まで)と昨年並みとなった。

特徴として新型コロナの影響により、会場ガイダンスが減少し、高校ガイダンスが増加、また、一部はWeb開催も導入された。

③高専連携の強化(部活支援活動、キャリア教育協力)

新型コロナの影響により、部活支援活動は行えなかった。また、高校のキャリア教育の受け入れについて今年度は、下関国際高校、下関工科高校より申し込みいただいた。新型コロナ感染拡大の影響により下関工科高校は中止となった。

下関中等教育学校より、心身の健康に関する講演の依頼があり職員2名が高校に出向き講演を行った。対象の生徒は中学生、高校生だった。

(7) 地域連携の充実に向けた社会貢献の推進

①地域ボランティア活動参加への促しと表彰

コロナ渦でボランティアの参加促しはできていないが、下関の海峡マラソンには学生がボランティアとして参加した。また、部活動支援については、今年度も活動ができなかった。

次年度からは、ボランティア活動、その他の社会貢献等に関する表彰も検討していく。

②各学年清掃活動の継続

今年度は、授業の一環で1年生全員による地域清掃活動を実施のみ。(理学)

(8) 業務効率化の促進

①業務効率改善に向けた職員の意識の改善

・看護学科

以前より業務効率改善を言われ、中央研修で「教員便覧」を作成した。役割の目的や内容など確認できたが、学年担当となると、その責任感で多くの業務を抱え込んでしまう。できるだけ皆で分担できるように学科会議で現状の情報共有を図り、対策を練ってきた。加えて年度途中で教員の病休や育休、短期ではコロナでの出校停止などで即戦力の低下があったが、皆がカバーしてきた。調整力として力がついてきたが、時間内は学生指導優先で、自分の講義準備やまとめなど後回しになり、残業時間が増えている。コロナ禍での Zoom 対応や臨地実習指導、国家試験対策などもっと整理して、人や時間、物を調整できる能力も高めたい。

- ・理学療法学科

学科会議等で常に「働き方改革」という言葉を周知し、残業をなるべく少なくする、業務効率を高める工夫を促している。年々と意識は高まっていると思うが、国家試験受験前に学生対応のため残業時間が増え、それが当たり前という空気感（雰囲気）が国家試験終了後にもみられたため、更なる周知徹底を行う。

②学内業務の見直しと適切な業務分担

- ・看護学科

前述したように、学科会議内で状況報告し情報は皆で共有し、対策を考えている。

令和4年度の役割分担を決定する際、教員から前向きな意見が出て、役割を分担することが出来た。

③効率化に伴う設備の充実

- ・看護学科

iPad やプロジェクター、シナリオの2台レンタルなど、必要性を認められ、活用できている。使い方を工夫することで時間の管理もでき、意欲にもつながっている。

- ・理学療法学科

パソコンの買替を検討している。

- ・事務

各科学科会議や役割等の会議での資料は iPad を活用して共有しているので、事務職員も空いている iPad を活用していきたい。

八千代リハビリテーション学院

～新しい生活様式の中での教育環境の整備と職業実践教育の推進～
教育教材の拡充を図り、環境を整備し、良好な教育体制を構築する。

職業実践専門課程認定の更新、学生満足度の向上を図る。

①教育上必要な機械器具の購入

- ・コンピューター室のパソコンとプリンターが前回の購入から8年近く経過しており、故障などのトラブルも多発し使用できないパソコンもあった為、授業に支障をきたしていた。

令和3年度私立大学等研究設備整備費等補助金を利用し、教員用パソコン1台を含む56台とプリンター3台の購入入替を行い、一度に55人が「情報処理」「統計学」などの授業を受けられる体制を整えた。

- ・授業内で障がい体験を行うのに「高齢者体験装具」を8セット、「片麻痺疑似体験セット」を5セット追加で購入し、全学生が十分に体験を行えるような体制を整えた。

②管理備品の買換え購入

- ・経年劣化により破損個所が多くあった、入学式・卒業式などイベントで使用する折りたたみチェア60脚を廃棄し、新たに100脚を購入した。
- ・重くて使いづらい普通教室の机の一部の買換えを行った。軽量の机に変えたことにより、教室内でのグループワーク等の配置換えなどが容易に実施できるようになった。今年度で普通教室の全ての机の入れ替えが完了した。

③環境の改善

- ・新しい生活様式の中で、緊急事態時や自然災害時などでも学生寮で遠隔授業を受講できるよう各居室にインターネット環境を整備した。なお、毎月の利用料は各々の寮生より徴収する。
- ・こまめな換気が重要視されている状況において、教室の窓の戸車の劣化により窓の開閉が固く困難な箇所が多々見受けられる。今年度の修繕を計画していたが、窓を外側に外さなければならないので足場を組む必要があり、翌令和4年度に既存棟の改修工事で足場を組む予定がある為、その時に一緒に窓修繕を行うように延期とした。
- ・公用車用のガソリンカードの枚数を増やして公用車4台全ての鍵とセットにし、急な場合でも職員が立て替えることなくガソリンが入れられるよう配慮した。
- ・職員への低コスト順のカラーコピー機の利用周知、裏紙で済むものに関しては裏紙の利用を促進し、会議資料はクラウドの利用で各自のiPadにて閲覧しペーパーレス化に努め、経費削減を心がけた。

④学外学習機会の確保

- ・臨地実習では実習指導者とオンラインで面談を行い、安心して実習に取り組める環境を整えた。
- ・実習施設の登録数を増やし実習の機会を増やした。
- ・八千代リハビリテーション病院を主たる実習施設として登録を行った。

⑤ICTを活用した教育の推進

- ・緊急事態宣言中にはタブレットを利用した遠隔授業を実施し、また国家試験前にも感染予防の為に遠隔で国家試験対策を実施した。

⑥効果的な広報活動の展開

- ・令和3年度入学生にタブレットとタッチペンシルを贈呈しICT教育に対応できるような体制を整えた。

- ・オンラインでのオープンキャンパスを組み込み、コロナ禍でも安心して参加できる体制を整え前年度以上の参加者の確保、定員以上の入学者数を確保できた。
- ・PT、OTを分かりやすく紹介する動画をSNS広告で活用した。

福岡和白リハビリテーション学院

～環境整備の推進～

(1) 学内改修

更衣室、2階男子・女子トイレ、職員エリア、玄関大階段の改修及び外壁の塗り替えを順次進めている。

(2) 大学設置法人へ組織変更することによる学校法人のガバナンス機能の強化

法人全体の取り組みに沿って、機能強化を図っている。

(3) ICTを活用した教育の充実

学生全員がiPadを所持している環境を実現できている。

授業にとどまらず、学生生活におけるお知らせ等もICT活用を図っている。

(4) 退学防止委員会

①進級率 PT 学科 87.6% (269/307) OT 学科 94.4% (119/126)

PT(昼間 1年 89% 2年 86% 3年 86% 夜間 2年 87% 3年 100% 4年 89%)

OT(1年 94% 2年 95% 3年 94%)

②退学率 PT 学科 9.8% (30/307) OT 学科 3.9% (5/126)

PT(昼間 1年 11名 2年 13名 3年 3名 夜間 2年 2名 3年 0名 4年 1名)

OT(1年 3名 2年 2名 3年 0名)

理学療法学科の進級率が 87.6%、退学率が 9.8%となった。昨年度よりコロナ禍で、教員と学生、学生間のコミュニケーション等が十分に行えていない影響もあると考える。

学習習慣が身についておらず、学業についていけない学生が多かった。

クラス内で学生同士が支え合う人間関係が十分に育っていない面もあると考える。

教員は小テストや実力確認テストなどを実施して、放課後等に学力低迷者の支援を行ってきたが残念ながら効果が上がったとは言えない。

コロナ感染が落ち着いてきた段階で、学生間や学生と教員のコミュニケーションを深める施策を行い、次年度もしっかり学習支援を行っていきたいと考えている。

社会に貢献できる人材育成
～ 学習環境および職場環境の充実 ～

(1) 創造力・実践力の向上を目指した教育の推進

①アクティブラーニングの推進

【看護学科】

「主体的な学び」では、1年次にグループワークで「看護の視点で考える」取り組みを行った結果、看護に興味や探究心を持った学生は多かった。よって、継続した取り組みに繋げていきたい。

「対話的な学び」では、COVID-19 拡大に伴い、授業ではオンライン授業を取り入れており特に実習の学びとして、学生同士での対話や学生と教員が対話する。こういった対話的な学びを実践できるような教育内容とした。

「深い学び」では、現在は学びを学びで終わらせている状況である。今後、学んだ情報を確かめながら自分の考えを形成したり、問題を自ら見つけて解決策を考えたり、アイデアを想像することが深い学びとなっていくので、質の高い学びが実現できるよう取り組んでいきたい。

【助産学科】

助産学科への入学者は明確な目的意識を持つ学生であるが、主体的学習者としての姿勢には個人差も大きく、グループディスカッションや調べ学習後の発表などの共同学習を通して学生間で学び合う機会を多く取り入れ、学びの楽しさを感じられるように支援している。又、目標を基礎から助産の実践まで段階を経ながら修得できるように支援することで、達成感をもてるような学習計画を立て支援している。

②シミュレーション教育の充実

【看護学科】

シミュレーションモデルを活用した技術教育や、状況設定のもとに判断力や応用的看護技術の強化などを実施した。特に臨地実習の実践活動外学習では、臨床の事象を焦点化して再現した状況の中で、学生が人やものにかかわりながら医療行為やケアを経験し、振り返り、検証することを学んだ。

【助産学科】

基礎学習後、実習に入る段階でシームレスに移行できるようにシミュレーション学習を取り入れている。今年度、内診シミュレーターや搾乳モデルを購入し、講義や実習前の演習、実習中のシミュレーション学習時に利用した。事例に応じて内診所見を設定し確認させ、内診技術の向上に役立てている。また乳房の観察や乳腺開口の観察・搾乳などの学生が苦手意識を持つ乳房ケアの強化に役立てた。今年度も COVID-19 症の影響により臨地で実習が行えない状況があり、学内で間接介助事例や、紙上事例を通しシミュレーターを用いよりイメージできる学習へとつながった。

③看護教員の教育実践力向上

オンラインでの学会や研修が増え、関連校の中央研修や個人が希望する研修に参加する教員が

増えた。今後も研修での学びは、新たな知識の開拓と教育に携わる意欲の向上に繋がる為、積極的に参加し自己研鑽に努める。

また、助産学科は、今年度6月に1名、8月に1名の教員が増員された。事前のオリエンテーションを凶ったものの、学生の満足度評価では支援体制が十分ではなく、教員ごとに指導内容の相違があった。指導内容の共有化のため、計画的会議の実行、紙面による共有により指導内容・方法の共有化を図っていく必要がある。

(2) 学生満足度向上に向けた取り組み

【看護学科】

学習環境として、成績と学習状況を踏まえて、放課後や休業期間を活用して学習支援を行った。学生自身が主体的に学習時間を確保し積極的に学ぶ姿勢が身につくような関わりの工夫をした。

COVID-19の影響により、学校生活に変更を生じた。その中で、感染予防対策として、健康チェック、手指消毒、マスクの着用、フェイスシールド装着、黙食など様々な決め事を守ることはできた。中には指導を要す学生もおり、その都度、全体に機会教育を行った。学校生活の中で感染を拡大させない為に、自粛生活は余儀なくされるが、医療従事者に関係する者であり、看護学生である自覚と責任をもつ機会であると捉え、看護師教育に携わっていった。

学生との援助的関係の確立では、教員がお互いに情報を共有し、学生が相談しやすい環境作りと守秘義務を守っていることを伝え、学生が安心して学校生活を送れるように関わった。また、私生活が大きく影響する事案に関しては、早めに保護者と連携をとり支援した。しかし、自宅でのオンライン授業になった際は学生の様子がわかりにくく、リアルタイムで相談できる環境ではなかった。学生の変化に気づけるよう学年担当は関わっていたが、学生からのアプローチが少ないと、教員がどんなにアンテナを高くしていても捉えるのに困難を要した。退学した学生も多く、進路に悩んでいる学生に応じた手厚いサポートが不十分であったことが課題である。

【助産学科】

看護の基礎援助能力として国の求める到達と実際入学してくる学生の状況の乖離が認められている状況がある。又 COVID-19 による看護基礎教育での習熟度が未熟であることが予測され、今年度内診シミュレーターや搾乳モデルの購入をした。そして自由に実習室・教材を利用できるように環境づくりをした。学生の満足度調査から、学習環境や教材・図書などに関しては満足度が高く、専門的な知識や技術を修得できるとの反応だったことは今年度の取り組みとして評価できる。

国及び県の措置（福岡コロナ警報、まん延防止等重点措置、緊急事態宣言）により感染防止対策を徹底し講義を行う。学科時間 465 時間の内 Zoom によるオンライン授業（Live 配信）20 時間であった。学生に対しては、日々の健康チェック、感染予防教育（散逸を避ける。防護偽の着用、換気等）、教室・学内に注意喚起を促す掲示は自己、クラスを守るという個人的視点と医療従事者としての視点で教育的効果があった。

入学時よりチューター制をしき支援にあたった。主に国家試験対策での支援が中心であり、就職や個人的相談ごとについては相談しやすい教員へ相談している状況であった。教員の学生に対する支援、カウンセリングやサポート体制、就職支援の満足度が低く、教員間の情報の共有、計画的な就職に向けた支援、教員の姿勢（いつでの相談できる安心感）など見直しの必要性がある。

(3) ICT 環境の運用

【看護学科】

ICT 教育に向けて、教員が活用できる iPad を購入し、オンライン授業時に活用した。それ以上の発展した ICT 教育までには至っていない。次年度に向けて教員および学生が ICT を活用して学ぶ場면을効果的に授業に取り入れ、学習に対する意欲や興味・関心を高め、「わかる授業」を実現できるよう、活用の工夫が必要である。

【助産学科】

情報通信技術の進歩と共に、様々なコンテンツを用いた学習形態がとられ始めている。特に実習を前に助産技術の手順に関しては動画を用いた学習や COVID-19 の感染予防や天候による登校の制約時のリモート学習など、ハイブリッド型学習の導入が急務である。しかし、教員の運用のための知識や技術が不十分であること、情報リテラシー、規約等の準備が必要である。

(4) 進級率・卒業率向上への取り組み

【看護学科】

退学した学生のほとんどが、親の勧めで本校に進学している。看護師に憧れや、なりたいたいと思わない為、学校生活に楽しさを見出すことができない。臨地実習を経験すると、少しは看護に対して魅力を感じる学生もいるが、看護師になるために努力をしようという気持ちの変化までには至らない。学生自身がどのようなタイミングで学校継続が困難と感じているのか、それぞれに応じた支援の工夫が必要である。

また、保護者に対しても学校の魅力が伝わるよう、事あるごとに学校教育に参観してもらうなど、三位一体となって学校教育を進めていくことが重要である。

【助産学科】

各教科を通して、助産師としての役割や責務について学んでいる。何より実習での対象との直接的関わりや、臨地で助産師の関わりの実際を見学することは、助産師としての技やマインドを育てる最重要となる学習機会となっている。また、卒業を前に特別講義や職能団体等の紹介などをおこない、専門職業人として自己研鑽の必要性など感じる機会となった。

今年度保護者会を開催することはなかった。学生を質問や意見がある場合はいつでもの連絡いただけるよう学生を介し伝えている。課題のある学生に関しては、原則成人学習者であるため、本人と相談の上対策を講じている。しかし学生個々の生活が整わず保護者と連絡を取ることもあった。

助産学の学習過程は看護学科と異なり、休日や夜間実習が発生する事、共同生活を行いながら実習に行くなどの違いがあるため保護者会の開催については、検討していく。

(5) 国家試験合格率 100%に向けた取り組み

【看護学科】

入学時より専門職業人として学習する意義や興味・関心を持たせるような学習方法を取り入れることで、課題等に関する取り組み状況は良かった。また、主体的に学ぶことができる学生を一人一人増やしていけるよう継続して学習支援を行った。しかし、学習時間は増えたが成績に反映さ

れない学生がおり、未履修科目がある学生が多い。1年次に応じた学習支援の在り方は検討が必要である。

2年次は看護師国家試験の必修問題を参考に、解剖生理学や病理学の強化学習に取り組んだ。意図的に時間を作ることで、学習スタイルが身につく、自宅学習に繋がるよう関わったが、自宅での学習期間が長期化すると学習が疎かになる学生がいた。学生自身が主体的にできるための介入方法は工夫が必要であった。

3年次はアドバイザー制をとり、学生個々に応じた学習支援を実施した。また、学内日は教科外での学習や研修時間を活用し、模擬試験の解説などを実施した。夏期休業期間中は学習支援を強化し、知識の定着を図った。しかし、積極的に参加する学生は少なく、国家試験に対する危機感が欠如している様子が窺えた。学習支援を嫌がる傾向にあり、個人での学習スタイルを主張する学生も少なくない。更に個人の気質的なものも加味し学習支援に困難を要した。3年間を通して国家試験対策を行う必要があり、如何に早い段階で学生を学習に対して本気モードに切り替えさせることができるのかが重要である。

【助産学科】

カリキュラムの構築としては基礎科目から専門へと進めればよいが、4月から7月末までの中で、講師の都合等もあり、十分ではない。助産診断・技術学の中で基礎を想起させ・他の科目での学びを意識させながら講義を進めている。

国家試験に向けては、入学時から終講試験に向けた科目別テスト、模擬意見計画、夏期・冬期強化学習など、学生と相談し全員合格に向けた取り組みを行っている。学生は1年間のスローガンをづくり、かかわる母子や指導者などへの感謝の想いと、国家試験全員合格に向けた意思を共有し、教室に掲示しており、教員も、学習の段階に応じスローガンを振り返る機会をつくり学生の意識付けにおいては効果があると感じる。

国家試験前には感染予防のためリモートでの学習を行った。成績低迷者に関しては、チューターを中心に学習支援と共に心理的支援を行った。学生の国家試験対策への取り組みアンケートから、満足度は高く、第105回助産師国家試験に全員合格することができた。

(6) 定員充足への取り組み

【看護学科】

学生募集活動として高校訪問とオンライン学校説明会を実施した。しかし、入試では指定校推薦・高校推薦の受験者数が減少した。再度、高校訪問を実施し、一般選抜前期は若干受験者数が増えたが、中期、後期と受験者数は減少した。更に辞退者数も多く、追加入試（後期Ⅱ・後期Ⅲ）も実施したが、定員充足には至らなかった。入金後の辞退者が多く、大学に合格したのではないかと予測される。学生募集活動の工夫および強化とともに学生に選んでもらえるよう、教育内容を充実させる必要がある。

【助産学科】

媒体の配布：受験者傾向から、九州中心の学校出身であることから、パンフレット等の郵送を関東以西の学校に行った。資料請求としては前年度より請求者数が増え、400件を超えた。

学校説明会：COVID-19 感染予防のためリモートによる座談会を6月、7月の2度行った。学生と直接話す機会は参加者にとって満足感が高かった。

学校訪問：電話訪問の計画としていたが、実施に至らなかった。

(7) 地域連携の充実に向けた社会貢献の推進

【看護学科】

COVID-19 拡大により地域清掃は2年生が1回実施した。年間を通して清掃活動を実施することにより、環境に対する興味や地域の変化に気づく力などを養うことに繋がる。次年度も継続を考えているが、できるだけ実施し、学生自身が多様な感性で社会貢献に参加できる力を養っていききたい。

様々なイベント等は中止されたものが多かったが、医療に携わる教育機関として、感染拡大防止のため参加を控えた。

【助産学科】

通常地域で行われる助産師会の研修等への参加などを行っていたが、今年度は開催なく参加する事はなかった。

(8) 業務効率化の促進

【看護学科】

職場環境の改善として取り組んだことは、教育に関する内容は、教員会議で討議し、教育の資質の向上に努めるようにした。継続して次年度も会議の場で意見が言える環境作りを行っていく。

業務内容に応じた勤務形態を実施しており、時間外勤務を行っている教員は少ない。役割や業務量によって時間外が発生している教員もいる。業務分担も考えて行く必要がある。学生指導など時間がかかる教育に関しては、マンネリ化せず問題意識を持って、全ての教員でどのような関わりが必要なのか検討する必要がある。時間をかけることに視点をあてるのではなく、やり方を変える柔軟な考え方を取り入れていきたい。

【助産学科】

教員会議や朝のミーティングで業務や教育内容についての検討を行っている。しかし、実習期間中計画していた会議を持つことが出来ず、教員の申し送りノートを用いた伝達、情報共有に終わっていた。新人教員もおり情報共有と、支援の充実に図るため、定期的開催を行う必要がある。また、新人教員への支援体制を整えていく必要がある。

時間外勤務については、実習の特性上難しく、30時間を超える月が複数にあり時間差勤務や当番制の他、勤務形態を工夫し、ワークライフバランスが図れるようにしていきたい。

(9) 就職支援、キャリア支援

【看護学科】

1年生は入学時に進路についてのアンケートを実施し、半数近い学生が進学（助産師）を希望しており、進学に対する意欲が高い。早い時期から学習する意義を理解し、モチベーションを維持しながら学校生活を送れるよう関わった。

2年生もアンケートを実施し、数名の学生は就職したい病院まで明確にしており、目標を持って学習に取り組むことができている。関連病院による病院説明会も早期に実施し、どんな看護師になりたいのか、どんな所で働きたいのか、具体的に考えることができるよう支援を行った。

3年生は進路についてアンケートを取り、面談を実施した。コロナの影響でほとんどの学生が、病院説明会やインターンシップなどに参加はできなかったが、教員の支援を受けながら進路を決定した。就職は64名おり、そのうち関連病院への就職は46名（福岡新水巻病院29名、新小文字病院15名、新行橋病院1名、東京品川病院1名）関連病院就職率は72%である。進学は2名おり、大学編入1名、助産学科1名である。全員、就職・進学が決定した。

【助産学科】

年間計画：入学時、就職希望調査および就職活動の方法、就職に係る書類等の説明を行い、4月中旬以降に面接。面接による就職先の具体化を図っている。入学時は総合病院、大学病院への就職希望者が多く、入学前よりインターンシップの計画を立てている学生がいる反面、なかなか具体化できない学生もおり、目指す助産師像をイメージし、主体的に自己の将来を見据えた企業研究などの取り組みを促している。

情報提供、施設選択に関しては、先輩からの就職先・試験内容のファイルや実習施設からの募集、郵送された募集要項の提示や、先輩の学校訪問時の紹介、SNSを利用した情報収集と情報提供を行っているものの、有資格者であることを前提に、書類の指導、面接練習は希望者に行うが、原則個人で進めていくようにしている。しかし、就職支援に関する満足度が低く、細やかな支援の必要性がある。

関連施設への就職状況は東京品川病院へ2名、実習施設へ2名就職した。コロナ禍であり将来の就職先選択にも影響があり、結婚等の事を考え、実家の近くに就職を希望する学生、また、正常分娩のある施設への就職希望者が増加している。

武雄看護リハビリテーション学校

～全校一丸となりブランド化を図り、魅力ある信頼される学校創りに邁進する～

(1) 医療人としての人間性・人間力の育成

ICT教育としてはコロナ禍の中、自然災害の対応も含めてオンライン授業などを定期的実施することで学習時間を確保することが出来た。

学校長による講話や日々の活動で学生に医療人としての心構えを指導しており意識付けが出来てきている。

学校行事（卒業式など）において学生が司会進行をするなど学生の自主性を育成している。来校者に対しての挨拶や態度で褒められることが多く、学校に活気が出てきている。

(2) 進路保証100%達成

進路：9年連続100%を達成することが出来た。教職員の熱心な履歴書や面接指導により昨年よりも早期に年内に両学科内定決定した。学校長には小論文の指導も繰り返ししていただき進学希望者も合格に繋がった。

関連病院への内定人数：理学療法学科 18/44 41%

看護学科 32/42 78%

(3) 国家試験全員合格

両学科100%合格のパーフェクトを達成することが出来た。

1年次からの指導の積み重ねと全職員が一丸となり、各学生の成績分析を随時行い、臨機応変に学習指導計画を建て実施していった。また卒業生や新武雄病院、ご家族など多くの方々からのご支援を頂き学生たちの意欲向上に繋がった。

(4) 退学者・休学者をなくす

今年度は理学療法学科1年生で7名、看護学科は3年生1名、1年生1名の進路変更や経済的事情で退学者が出てしまった。

担任を中心とした学生支援を行い、随時スクールカウンセラーや関係機関、保護者との連携を今後は図ることが大切になってくる。

コロナ禍であり、学生のストレスチェックを行いながら健康管理も行ったが、体調不良で欠席するものが昨年と比較して多かった。皆勤賞も昨年は75名で今年は52名と減少した。

電話やメールで保護者連絡を行っているが、クラス会などの全体会は新型コロナウイルスの影響で実施できていない。しかし新たに学事システムへ保護者へのメール送信機能をつけ運用開始して活用していきたい。

(5) 魅力ある指導実践

ICT教育の充実を図り、佐賀県からの公的補助金を活用し情報機器の整備を行った。新しいプロジェクターやAppleTVの設置など学習環境をより良い状況とした。教員の技術向上も図っており、アプリ（ロイロノート）を活用し学生が自宅でも教員と課題のやり取りが出来るシステムを日常的に取ることが出来ている。ただ、試験結果については理学療法学科で再試験対象学生が倍増しており学生へのより分かりやすい講義の工夫や修学対策が必要である。

再試者数)

理学療法学科

2020年度 1年生38件 2年生19件 合計57件

2021年度 1年生87件 2年生39件 3年生1件 合計127件

看護学科

2020年度 23科目 合計65件

2021年度 21科目 合計65件

(6) 地域、行政と連携したボランティア活動

今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、各行事が中止になることが多かった。しかし、献血や水害による市内のボランティア活動など多くの学生たちが積極的に参加してくれた。

また武雄市社会福祉協議会の共生型ふれあい事業のボランティアに参加し、作品の完成に協力することができた。学生は積極的に参加したいという意欲があり自己啓発ができています。

(7) 高校との信頼構築で定数確保

今年度は、新型コロナウイルス感染予防対策で5月の学校説明会は中止したが、その後夏のオープンキャンパスを3回・学校説明会は6回実施した。また、オンラインでの参加や、個人での学校説明等にも対応している。また、「佐賀県専修学校啓発事業研修」に参加して、高校生等の情報も広く知ることができた。各高校へパンフレット、募集要項に加え、今年度も卒業生からのメッセージや近況報告を郵送するなど、本校の雰囲気や良さがより伝わるような工夫を行った。ホームページやSNSなどでも学校情報を頻回に正確に配信している。

今年も理学療法学科は早めに定員へ達したため、前期入試で募集を終了した。看護学科は後期入試まで実施して定員確保に繋げた。

(8) 教育費等の削減と業務の効率化

看護学科、理学療法学科ともに近隣の実習施設の獲得を行った。コロナ禍であるが可能な範囲で受け入れしていただいている。

学内の教材の追加購入をしたため、講堂と普通教室とを遠隔で繋ぐシステムも設け感染対策として活用できている。

しかし、夏の水害による駐車場の整備や備品の破損があり、また開校から10年が過ぎ施設の破損箇所が出てきて随時修繕を行わなければならなくなっている。

(地盤沈下・下水処理ポンプの故障)

消耗品について、令和2年度より佐賀県私立学校運営費補助金「特定経費枠」にて約400,000円の補助金で消耗品の一部である新型コロナウイルス感染防止対策のため手指消毒・アルコール・パーテーションの購入に充てている。

また、コピー機のカウント料が毎年高額となっている。

令和2年度 1年間カウント料 約4,000,000円

令和3年度 1年間カウント料 約3,600,000円

11月から国家試験対策での模試問題作成・テスト用紙作成で毎月500,000円ほど使用している。今後、個人タブレットでの問題作成ができればと思う。

電気料は令和2年度LEDの取り付けも完了し、令和2年度、3年度はそう変動はない。

【参考】令和元年度電気使用量 234,426Kwh 電気料 5,370,000円

令和2年度電気資料量 232,158Kwh 電気料 4,657,088円

令和3年度電気使用量 238,960Kwh 電気料 4,578,317円

令和3年度は理学3年生で講堂を1年間使用していたため、電気使用量は若干増加しているが、契約電力単価が404円から令和3年は401円となっており、全体に電気料は約78,000円減少している。

る。しかし、今後も誰もいない教室での電気・空調の付けっぱなしをなくすよう努力していく。

(9) 教職員の資質向上

職員の研修は、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン形式の研修会が増えたため積極的に参加することが出来た。学習指導力の向上は見られたが生活指導力については研修の必要性がある。優先順位を踏まえた行動やスピード感を持つ大切さを指導していかねければならない。

(10) 学生の住居（アパート）の確保と交通手段

(女子寮)

令和2年度 レモンガラス 16 部屋 第2寮（なないろ） 12 部屋 28 部屋 56 名入寮

・家賃負担 480,000 円 プラス

水道光熱費 3,439,480 円

合計 2,959,480 円 令和2年度学校負担分

令和3年度 レモンガラス 15 部屋 第2寮（なないろ） 12 部屋 27 部屋 53 名入寮

・家賃負担 126,000 円 プラス

水道光熱費 3,596,653 円 ※2月3月分は昨年度実績とする。

合計 3,470,653 円 令和3年度学校負担分

今年は寮生の人数が奇数で、一人分の寮費が減収となり学校負担となっている。

今後は光熱費高騰を踏まえ、学生へ節電の意識づけを徹底していく必要がある。

また、第2寮にはネット環境が整備されておらず、コロナ禍においてのオンライン授業に支障をきたしているため今後は整備し、学生の学習環境を整えていく。

(男子寮)

道の家 13 名入寮

他学年・他学科で交流を持ちながら寮生活をしている。また男子寮の管理は学校でないため寮生と本校職員が面談を行いながら道の家寮担当との連携を図った。

コロナウイルス感染においては特に早急な判断・対応が求められた。

(校内駐車場)

校内の駐車場の整備も行い、学生利用台数は80台と昨年度よりも利用台数が増えた。

(11) 開校10周年に向けての準備作業（式典準備）

コロナ禍であり、10年の節目も過ぎ15周年に向けての計画を考えていかなければならない。



巨樹の会

～医療系学科だけの学校法人～